

# 1930～40年代の天津における 日本人教育に関する一考察 —天津中日学院の補給生を中心に—

李 雪

キーワード：天津中日学院 第一種補給生 教育実態 対華文化事業

**【要 旨】** 本稿は1930年代から1940年代前半にかけて、天津中日学院における日本人教育を取り上げ、外務省外交史料館の資料、東亜同文会事業報告、当事者の回想録などの第一次資料を用いながら、外務省が同校に派遣した「日本少年留学生」の学習及び生活状況について考察するものである。

1930年、外務省の対華文化事業の一環として、中国に「補給生」を派遣する留学制度が発足した。補給生は、第一種、第二種、第三種と分かれていた。天津中日学院（東亜同文会による設置）は第一種補給生の教育を担い、1930年より1945年にかけての16年間で、第一種補給生48人を受け入れ、32人の卒業生を送り出し、彼らの多くは中国の大学に進学した。

天津中日学院は補給生のために予科を開設し、終了後、正規課程に編入した。中国人教員を雇用し、中国語学習の時間を設けることによって、徹底的な中国語教育を展開し、第一種補給生の中国語は「驚くべき」進歩を遂げた。補給生は天津中日学院で中国人生徒と寝食をともにし、交流を深めながら学んだ。また、様々なスポーツ活動を展開したほか、修学旅行を通じ、補給生の中国に対する理解の深化が図られた。

ただし、その後、戦時体制となっていくなか、同校の日本人に対する教育は、軍国主義・国家主義的な目標が掲げられるようになり、天津中日学院は、植民地教育の実施装置となっていく。

## はじめに

本稿は1930年代から1940年代前半にかけて、天津中日学院における日本人教育を取り上げ、外務省外交史料館の資料、東亜同文会事業報告、当事者の回想録などの第一次歴史資料を用いながら、外務省が同校に派遣した「日本少年留学生」の学習及び生活状況について考察するものである。

1900年、義和団事変が勃発し、日本政府は天津に清国駐屯軍を派遣した。清国駐屯軍憲兵隊大尉・隈元実道は天津の日本租界で日出学館を創立し、中国人子弟に対し教育を実施した。それを皮切りとして、天津において日本人による教育活動が展開されることになる。

一方、天津における日本居留民の増加に伴い、日本人子弟の教育も次第に重要視され、日本人を対象とした小学校、中学校、女学校なども相次いで設立されるようになった。1900年から1945年までの約半世紀、日本は天津において数多くの教育機関を設けたが、対象者はほとんどが中国人のみか日本人のみであった。しかし、本稿で取り上げる天津中日学院は例外である。

1923年3月、日本政府は義和団事変の賠償金、および山東半島利権返還の補償金を基金に「対

支文化事業特別会計」を設け、日中両国における学術研究機関・図書館の設立、諸団体による社会活動への援助、留学生招聘などの文化交流を計画し、対華文化事業<sup>1</sup>をスタートさせた。

天津中日学院は中国人に対する教育のために1921年に東亜同文会によって設立された中等教育機関であり、成績優秀な卒業生を公費留学生として日本に派遣した<sup>2</sup>。同校は創立から1945年に廃校されるまで24年間存続し、500名以上の卒業生を輩出した<sup>3</sup>。

外務省は1930年11月に「将来東方文化研究上の中心となり且つ日支両国文化提携上の楔子となる人物を養成する」ことを目的とし、中国に日本人留学生を派遣した。天津中日学院は1930年代から1940年代にかけて、外務省から派遣された日本少年留学生を受け入れ、補給生の教育に携わっていた。

日本人の中国留学史の研究は日中文化交流の重要な部分である。ただし、補給生に関する先行研究は、大里浩秋の「在華本邦補給生、第一種から第三種まで」<sup>4</sup>以外に、ほとんど見当たらない。大里論文では、その実施状況を概観しているものの、補給生の留学生活など具体的な様子は言及されていない。

大里論文によれば、補給生は第一種、第二種、第三種の三種に分けられ、第一種は日本の小学校卒業以上の者から選ばれ中国の中等学校に留学させる者、第二種は中等学校卒業の者から選ばれ中国の専門学校または大学に留学させる者、第三種は大学、専門学校卒業生から選ばれ、中国の大学、大学院、専門学校に研究させる者であり、外務省によって学費及び生活費が支給される<sup>5</sup>。補給生の中では、第一種補給生が最も期待され、重点が置かれていた<sup>6</sup>。

第一種補給生の受け入れ機関である中国側の中等学校の中で、天津中日学院は中核的な存在であった。同留学制度が実施された二年目には（1931年）天津、漢口、奉天及び青島の中学校に生徒が派遣されたものの、それ以降、派遣先は天津中日学院と江漢高級中学校しかなかった。また、1937年の日中戦争後には、江漢高級中学校が開校できなくなったため、同校の補給生は全員天津中日学院に転校させた。このように、天津中日学院は一貫して第一種補給生を受け入れ、教育した実施機関である。それゆえ、第一種補給生を研究するには、天津中日学院における教育が重要かつ不可欠なところだと思われる。

本稿は、先行研究を踏まえたうえで、新たに発掘された第一次資料を利用しながら、1930年代から1940年代前半にかけての第一種補給生向けの教育展開を明らかにすることを、課題として設定する。具体的には、まず天津中日学院は補給生を受け入れた経過、次に補給生はどのように中国人生徒とともに学習し、生活していたのか、課外での生活をどのように過ごしていたのかについて、初歩的な考察を加えることとする。天津中日学院の第一種補給生の研究を通して、外務省の補給生派遣政策に対する理解が深まるのみならず、戦前・戦中期の天津における日本人教育の展開状況も明らかになるだろう。

なお、本稿における「支那」「対支」「日支」等の表現は当時の名称であるため、そのまま使用する。

## 1. 補給生の受入経過

本節では、東亜同文会事業報告、天津中日学院総務長を務めた藤江真文の回想録『自画自賛』

に基づき、天津中日学院における補給生の受入経過について、1930年から1945年まで年度毎に整理する。

### 1.1 一、二年目の受入状況

藤江真文は、天津中日学院の創立時より幹事になり、1928年からは総務長として、1945年同校が解散するまで勤めていた。彼の残した回想録『自画自賛』では、第一種補給生制度の誕生について次のように言及している<sup>7</sup>。

1931年2月初め、外務省から「協議したいことがあるから総務長を至急上京させよ」という電報が総領事宛てにきた。対支文化事業部の三枝茂智課長は華語並びに中国事情に精通する日本人を養成したいという念願を持っており、その構想を既に練っていたが、出来上がるには、総務長（天津中日学院の総務長：筆者註）の協力が必要だと考えていた。当時、第二種及び第三種補給生の選抜は外務省文化事業部によって行われ、第一種補給生の選抜は天津中日学院または東亜同文会によって担当されるという計画であった。藤江総務長は東亜同文会の牧田理事と協議して同計画を引き受け、三枝課長、牧田理事、藤江総務長の三者協議して同年度の対策として、以下のように決まった。

- 一、第一回生<sup>8</sup>の人選は、満州、山東、北京、天津の居留邦人の子弟から選抜する。
- 二、早急に対支文化事業部長から、上記各地の総領事、領事並べに関東庁、大使館あてに趣意書、規則書等を送り募集を依頼する。
- 三、藤江総務長は二月末、各地をまわって応募者の提出書類を受け取り、本人に面接し、学力テストを行う。
- 四、藤江総務長は三月上旬帰院し、学力、面接の結果並びに出身学校長の内申書を検討、予選を行った後上京し、三者協議して最後の決定をなす。

……

第一種補給生の選出は補給生留学制度が打ち出された当初より、東亜同文会及び天津中日学院が深く関わっていたのである。天津中日学院は補給生の受入機関であるのみならず、藤江総務長が自ら選抜試験を行ったことから、補給生選抜の役割も果たしていた。

1930年11月、天津中日学院は、初めての第一種補給生として石川福太郎を受け入れた。石川福太郎は本籍が東京で、天津日本租界の天津日本小学校出身であった。彼は同校卒業後天津実業専修学校に入学し、在学中推薦を受け、1930年11月1日より第一種補給生として天津中日学院に入学した<sup>9</sup>。それ以前、天津中日学院では中国人を対象とする教育が実施され、日本人学生を4名（1名退学、1名在学中死亡、2名卒業した）<sup>10</sup>受け入れていたが、それはいずれも補給生ではなかった。1930年の石川の入学以降、天津中日学院に入学する日本人学生はすべて外務省により派遣された補給生であった。

1931年、天津中日学院は7名の第一種補給生を受け入れた。そのうち、5名（小澤茂、川口晁、永江和夫、鈴木隆康、尾崎正明）は4月天津に到着後、早々に同校の予科に編入され、8月の入学試験に合格し、9月より初級1年生になった<sup>11</sup>。上記の5名と昨年入学した石川福太郎は

全員中国に在住していた日本人居留民の子弟から選出したものであった。それに対して、同年9月天津中日学院に入学した鈴木明と秋元一郎は東京府立第一商業学校出身で、日本在住者から選出された。ただし、鈴木・秋元の2名は1931年に行われた入学試験に間に合わず、予科の期間として翌年8月までの1年間を設けた<sup>12</sup>。同2名は1932年8月の入学試験に合格して、初級1年生となった。

## 1.2 日中戦争前の受入状況

1932年に第一種補給生の選考は行われなかったため、天津中日学院日本留学生の在籍生徒数は前年度と変化せず8名であった。1933年、外務省は17人の候補者から9名を選出し、その内の7名（山下二郎、高木芳郎、木村隆吉、秋山善三郎、箕浦彦廣、尾坂徳司、大藤猛夫）を天津中日学院に派遣した。7名の内訳は、東京府立第一商業学校出身者2名、東京府立第三商業学校出身者4名、小石川高等小学校出身者1名、全員日本在住者であった。補給生は6月から8月の間、予科に編入され、8月末の入学試験に合格して、9月から初級1年生となった<sup>13</sup>。上記の7名のほか、1931年外務省に選出された第一種補給生の池上貞一は、当初青島礼賢中学校に入学したが、父親が帰国して青島に世話をしてくれる人がいなくなったため<sup>14</sup>、1933年9月の新学期で天津中日学院に転校し、初級3年に編入した。天津中日学院に在籍する補給生は合計16名になった。

1934年に外務省は第一種補給生10名を採用し、その内7名（杉田節次、井上伸一、高木満、山上高行、小峯王親、小菅徳信、伏見健一）を天津中日学院に派遣した。その7名は東京府立第一商業学校出身者3名、同第三商業学校出身者3名、中国の済南小学校出身の日本人居留民1名であった。1934年5月から8月、補給生は予科で勉強し、入学試験に合格して9月より初級1年に編入した。また前年度転入した池上貞一は病気で1年間休学した<sup>15</sup>。

1935年5月にさらに2名の第一種補給生が外務省より天津中日学院に派遣されたが、東京府立第一商業学校出身の大久保任晴、東京府立第三商業学校の小島敬三の2名であった<sup>16</sup>。病気で休学した池上貞一は全快となり復帰したが、進級せず高級1年に編入した。そして、同年に補給生の中、病気で休学者は3名おり、その内2名が回復したが、尾崎正明は長期休学となった。1936年、トップを切って1930年入学の補給生石川福太郎が高級中学を卒業し鐘淵紡績会社支店に勤務したが、後に興中公司の懇望により鐘紡を辞し興中公司に勤務した<sup>17</sup>。石川は1930年天津中日学院に入学した当時すでに18歳で、卒業時は24歳であり、年齢的に進学より就職が適切と考えられた。そして同年に新たな補給生は派遣されなかった。

天津中日学院は1937年5月5名の第一種補給生を受け入れたが、7月に5名の卒業生を送り出した。外務省に派遣された5名の補給生は岡部長司、島崎吉隆、斎藤平一、井尻章、内海清次郎で、東京府立第一商業学校出身者3名、京橋商業学校出身者2名であった。1937年7月日中戦争が勃発し、ちょうど高級3年の補給生が卒業する時期に当たり、1931年に入学した小澤、川口、永江、鈴木4名は軍臨時通訳を務めた。1934年に入学した高木は初級3年卒業で、進学せずに軍通訳を務めた<sup>18</sup>。一方、戦火の拡大によって、江漢高級中学校に入学した第一種補給生は勉強できない状態に陥ったため、一時帰国してから同年9月全員天津中日学院でまとまって勉強することになった。江漢高級中学校の廃校に伴う転校生は馬殿幸次郎・藤巻晃（1931年第一種補給生）、木村健之助（1933年第一種補給生）、小林哲郎・川崎剛一・若杉幸成（1934年第一種補給生）、小

野一郎・水谷宏・斎藤秀雄（1935年第一種補給生）、坂本敏彌（1937年第一種補給生）などの10名であった。

1932年外務省は第一種補給生の事務管理を一括に東亜同文会に委任した。1932年から1937年の6年間、天津中日学院に派遣された第一種補給生は日本在住者がほとんどで、出身校としては東京府立第一、第三商業学校のものが多かった。その理由を明確に記載した記録は見当たらないが、東亜同文会が便宜を図り、上記の商業学校出身の者を優先的に採用したと考えられた。

### 1.3 日中戦争後の受入状況

1938年には、新たな第一種補給生の派遣は行われなかった。同年の高級中学校卒業生は、1931年天津中日学院に入学した鈴木・秋元、1933年青島から転入した池上、及び1937年江漢高級中学校から転入した馬殿・藤巻の5名であり、全員1931年に選出された第一種補給生であった。1937年卒業した4名の補給生は軍臨時通訳を終え、その内3名は第二種補給生となり、大学に進学した（鈴木は東亜同文書院、小澤・川口是北京輔仁大学）<sup>19</sup>。1938年卒業した5名は卒業直後、鈴木・藤巻は静養を要するため実家に戻ったが、残る3名は天津中日学院において東亜同文書院の入学を準備した。藤巻は1939年に国立北京師範大学に入学し、鈴木は大学に進学せず東京放送局に就職した。なお、1934年に入学した杉田節次は病気で逝去している。

1939年も第一種補給生の採用はなかったが、1933年天津中日学院に入学した7名は全員高級中学校の学業を終え、卒業を迎えた。そして、その7名は外務省の第二種補給生となり、大学に進学することとなった。7名の内、山下、尾坂、箕浦の3名は国立北京大学文学院に入学し、木村、高木、秋山、大藤の4名は東亜同文書院に入学した<sup>20</sup>。しかし、1931年に入学した尾崎正明と1937年に江漢高級中学校から転入した斎藤秀雄は病気で死去した。

1940年には、天津中日学院は第一種補給生の代わりに、第二種補給生25名を受け入れた。第二種補給生のため、同校は1940年10月から翌年8月まで高級予科を設け、中国語の授業を中心に実施し、予科修了後、第二種補給生は高級2年に編入した<sup>21</sup>。また、同年の卒業生は、1934年に入学した井上伸一、山上高行、小峯王親、小菅徳信、伏見健一5名の外、1937年に江漢高級中学校より転学した小林哲郎、川崎剛一、小野一郎、木村健之助4名、合計9名であった。9名の内、井上、山上、伏見、小林は東亜同文書院に入学し、他の5名は国立北京大学文学院に入学した<sup>22</sup>。

1941年、天津中日学院には新たに補給生を受け入れなかった。1935年に入学した大久保任晴、小島敬三及び1937年に江漢高級中学校から転入した水谷宏の3名は卒業し、いずれも東亜同文書院に入学した。1942年も補給生の受け入れをしなかったが、第二種補給生は高級2年の学業を修了し、その内成績優秀者8名（藤江愷修、広瀬勝鮮、奥田稔、御厨秀男、鈴木多門、岡邦一、杉田堯舜、間島馨）は国立北京大学法学院、1名（木村修一）は国立北京大学農学院に入学した。残る第二種補給生は休学者1名を除き、16名が高級3年に編入された<sup>23</sup>。

1943年も引き続き補給生の採用は行われなかった。第一種補給生内海清次郎、島崎吉隆、井尻章の3名は高級中学卒業期を6月から3月に練り上げ、東亜同文書院に入学した。第二種補給生は、佐中正、尾本馨、久道友一、勝智盛正、津嘉山朝裕、静永俊雄、大倉元一、平田昌義の8名は国立北京大学に、小杉喜一郎、斎藤善次郎の2名は南京中央大学に入学した<sup>24</sup>。

第一種補給生の採用は1937年以降一時中止になっていたが、1945年4月に復活した。天津中日学院は米田清、望月教光、鈴木克己などの8名を受け入れ、予科を再開し、初級1年への編入を準備していた<sup>25</sup>。しかし、1945年8月日本の敗戦により、同校が廃校となり、補給生は留學生活を早々に終了した。

1937年日中戦争後、日中関係悪化のため、第一種補給生の派遣が一時中止された。とはいえ、1931年から入学した日本人生徒は高級中学の課程を修了し、相次いで天津中日学院から卒業した。彼らは卒業後、多くが第二種補給生として採用され、東亜同文書院、国立北京大学、国立北京師範大学などの大学に進学した。また1940年に一度に数多くの第二種補給生が派遣され、効率的に中国語を教え込んでから中国の大学に進学した。

以上、天津中日学院の補給生受け入れ経過を整理した。こうしたように、同校は1930年より1945年にかけての16年間で第一種補給生を48人受け入れ、32人の卒業生を送り出し、多くが第二種補給生となり、中国における大学に進学したことが分かる。また、同校は第二種補給生を一度しか受け入れなかったが、25名の内卒業生20名を送り出した。なお、表1は1930年から1937年までの各学級の日本人生徒数在籍状況をまとめたものである。

表1 天津中日学院補給生生徒数（1930—1937年）

	予科生	初1	初2	初3	高1	高2	高3	卒業
1930年		1						
1931年	2	5	1					
1932年		2	5	1				
1933年		7	2	6	1			
1934年		7	7	2	6	1		
1935年		2	7	7	3	5	1	
1936年			2	7	7	4	4	1
1937年		5		2	6	7	4	6

出典：1930年—1937年東亜同文会事業報告より、筆者作成

## 2. 予科の開設

外務省が中国語と中国事情に精通する人材を育成するために、補給生留學制度を設けたので、その趣旨を以て天津中日学院は補給生の教育を展開した。補給生に対する取扱いでは、最も特色があると言えるのは中国学生と共学、同宿する点である。しかし、中国語を知らない少年留學生をいきなり中国学生と共学させることは無理であるため、予科の開設が必要である。本節では、補給生は予科課程における学習状況について考察する。

### 2.1 予科に入学するまで

補給生が派遣された時期は大体毎年4月から6月の間である。ところが、天津中日学院は中国教育部の学制に基づき、その時期はちょうど第二学期の半ばであり、学年末<sup>26</sup>に近いのである。たとえ初級1年に編入しても、中国語も他学科の学力差が甚だしいと思われる。

ゆえに、天津中日学院は少年留學生のために、4月から新学年の始まるまでの4ヵ月、予科を設けて中国語を中心に教え、8月に中国人の入学希望者と一律に入学試験を参加させることにし

た。ちなみに、予科は補給生が天津中日学院に派遣された日程により開設されたので、必ず4ヵ月とは限らない。その期間は、長い場合、1931年9月に入学した鈴木、秋元が予科で1年間を勉強し、短い場合は1933年入学した7名が6月から8月までの2ヵ月で終わらせた。

藤江総務長の回想録では、1931年採用した補給生の予科入学について、「少年留学生の予科入学は四月四日父兄同伴当院、四月五日宣誓式、四月六日授業開始」<sup>27</sup>と記述した。それから、少年留学生は父兄を伴い、天津中日学院に到着後の状況に関しては、「予科の間は寄宿舎の一室にまとめて収容することにしたので、この部屋に入れてくつろがせ、食事も総務長宿舎で、日華折衷のものを与えて中国食に慣れさせるようにしていたので、父兄ともどもここで食事を済ませた。父兄の寝室も総務長宅に準備していたが、父兄たちは我が兄と共に寄宿舎で一緒に寝たいと望むので、父兄の意にまかせた……(省略は筆者、下同)」<sup>28</sup>と記述している。なお、補給生の面倒を見るために、天津中日学院の日本人教員中村真一が補給生の生活全般を担当した。中村は早稲田大学英文科卒で、1929年より同校の英語教員として勤めていた。

## 2.2 補給生の取扱い

1931年東亜同文会の事業報告では、天津中日学院の補給生に対する取扱いについて、具体的に以下のように規定されている<sup>29</sup>。

東亜同文会にては模範として選抜による学生を本校に派遣することに決定し四月初めこれが実行を見たり。本校としては之を取り扱ふに大体次の如くせり。

- (1) 先づ予科学生として主として支那語を学習せしむ。
- (2) 本年四月派遣の学生に対しては四月より八月までを予科生として毎週合計30時間学習せしめ八月二十一日の新学年より第一学年に編入せしめたり。

科目	中国語	数学	英語	国語	支那事情	日本史	修身	体育
時間数	15	3	3	2	2	1	1	3

- (3) 既に第一学年に在学せる者には四月より、又予科を修了したる者に対しては新学年より日語科の時間には中国語を修得せしめ、且つ所定の課程の外修身、国文等の学科を課外として学習せしめ更に四月入学の学生は英語の学力尚足らざるを以て課外として之をも課したり。
- (4) 学生は之を寄宿舎に収容し、予科の間は各室に二名宛第一学年に進級後は各室に一名宛分配収容し、以て中国語や風習知得に便ならしめたり。
- (5) 東亜同文会に在りては九月更に二名の学生に対しては明年八月まで予科生として主として中国語を学習せしめ他の学科は前記予科課程により学習せしむる予定なり。

上記の(2)は1931年予科生の学科目を示したものである。なお、1934年入学した補給生のために、予科は「華語17、修身1、日本歴史2、国文3、英語3、算術3、講話(民国事情訓話等)5にして、体育は課外運動を一般学生と共になさしめ之を補ひたり。七月より八月十五日に至る暑中休暇中は華語12、修身2、華語算術3に減じ、余力を以て華語作文の練習をなし専ら入学試験の準備に努めしめ……」<sup>30</sup>といった科目が開設された。

補給生にとって、予科では、最も重要な科目は中国語である。かつ、中国事情に精通するために、「民国事情」「支那事情」などの授業は予科段階から設けられた。並びに、国語、日本史、修身など日本の学校で行われる科目も開設され、予科終了後、初級1年以降も引き続き正規授業の外に履修することとなった。なお、8月末の入学試験のため、数学、英語などの授業もある。

天津中日学院は認定を受け、民国政府の教育部に認められた中等教育学校であるため、補給生は正規生になるために、入学試験を受験する必要がある。補給生は日本人にもかかわらず、「支那学生と少しも差別をなさず受験者の中に加へ、正規の試験を受け…好成绩を以て合格し、教育部へ登録を了したり……」<sup>31</sup>、中国人生徒と同様に入試を受験し、無事に合格することができた。

### 2.3 中国語の学習

天津中日学院は中国語を、「支那語は日本留学生の最も必要にして主要なる学科」として位置付けた。同校は、留日予備校の役割を果たしていたので、中国人教育に対して、日本語に重点を置き、初級1年と2年において、週間12時間の授業を設けた<sup>32</sup>。また、1929年以降日本語授業は全員日本人教員によって担当され、学年が上がるにつれて、一部の科目授業も日本語で実施された。にもかかわらず、日本人の少年にとって、中国人生徒と共学するには、中国語が一番大きな壁であった。

#### (1) 第一種補給生に対する中国語教育

前述したように、補給生を受け入れる前に、天津中日学院はかつて4名の日本人生徒を受け入れ、彼らに対する中国語の習得については生徒各自の自習に任せたが、1930年11月に入学した石川福太郎の場合と同様に課外の時間を利用し、校外の中国語教室に通った。

1931年新たに7名の補給生が入学し、「学生に対しては華語の徹底を期する為め専任教員を聘したき希望なり」<sup>33</sup>とのことなので、天津中日学院は初めて中国語教員郭大鈞を雇用し、日本人生徒の中国語教育を担当させることにした。郭は順天文興官立初級師範学校卒業し<sup>34</sup>、「……北京で旗人出身、華語専門学校の優秀教員であったのを抜擢した……」<sup>35</sup>という。

補給生に対し、予科において中国語の強化が実施され、進学後も中国語授業も継続的に行われていた。その状況について、「華語は日本学生の最も必要缺くべからざるものなるを以て、特に一名の専任華語教員を聘し、初級に於いては民国学生が日語を学ぶときに華語を学習せしめ、高級にありては民国学生と共に我国文を学習するを以て右教員指導のもとに華語を研究せしめ居れり」<sup>36</sup>と報告されている。即ち、初級中学では、日本語授業の時間を用いて、補給生は中国語を勉強した。一方、高級中学課程において、補給生は日本語の授業時間で中国人生徒と同じく日本語の勉強をしたが、課外の時間を利用し中国語を学習した。その他、補給生は原則として冬休み、夏休みには帰省せず（三年に1回帰省）、その期間を利用して、集中的に中国語学習を行っていた。

補給生は4ヵ月の予科を通して、その中国語は「第一学年生として中国学生と共に課業を受け講義も大体解する程度に進」んだ。中国語を習得した日本人少年は、中国人生徒と共学できるようになった。

#### (2) 第二種補給生に対する中国語教育

1940年に外務省対華文化事業部は第二種補給生25名を天津中日学院に派遣した。彼らは同校の

高級予科で中国語の学習を一年間してから、高級2年に編入し、大学受験の準備をしていた。それでも、第二種補給生は中国語学習の時間が短かったため、既に4年間あまり中国語を勉強していた同校高級2年の第一種補給生との間の中国語学力の差は甚だしい。

第二種補給生は「中学出身者と実業学校出身者とは亦多少学力の差」があったため、中国語学習のほか、国文科の勉強にも「教授上学習上師生相互に不便困難を感ずること甚だし」かったのである。それを克服するために、天津中日学院は「正規の華語の外に国文科の補習を毎日放課後一時間国文科教員に依嘱し之を実施し……学生の要望を容れ朝の点灯自習を許し、又消灯後別室にて更に一時間延長自習を許すなど自習に便し居れり」<sup>37</sup>といったサポートを提供し、第二種補給生も「之を自覚し居り、その努力涙ぐまじきものあり……」、学力の差を短縮させようと努力した。

ただし、第二種補給生は年齢の関係があり、第一種補給生のようになかなか中国語の成績が上がらなかった。また、病気による休学者や死亡者が5人も現れて、学習効果にも影響を与えた。藤江総務長は「華語学習としてはあまり成功しなかった」と評価していた。

以上のように、天津中日学院は補給生のために中国人教員を雇用し、中国語学習の時間を設けることによって徹底的な中国語教育を展開し、第一種補給生は中国語が「驚くべき」進歩を遂げたのに対し、第二種補給生の場合、年齢や病気などのため、中国語学習は結局成功しなかった。

### 3. 補給生の教育と成績

#### 3.1 授業学習

第一種補給生は予科課程を終了した後、初級1年に編入され、中国人生徒と共学、共宿の生活が始まった。生活面においては、2.2節に述べたように、各宿舎に1名の中国人生徒を配分した。また教育面においては、「初級中学にありては支那語の外は全部支那学生と異なる所なくまた高級中学にありては支那語は課外となり支那学生と共に日語を課して全く彼等と同一の取扱……」<sup>38</sup>を規定していた。即ち、補給生は中国語授業のほかに、すべて中国人生徒と異なりがなかった。

中国人生徒と共通する科目のほか、補給生は「国文、国史及修身、公民につきては休暇中これを補習する外、国文につきては毎週一時間補習せり四月よりは国文及公民につき毎週一、二時間補習のこと……」<sup>39</sup>という規定があった。補給生は課外時間を利用しさらに国文、日本史、修身、公民などの日本の中等学校に開設された授業も勉強せざるを得なかったのである。

補給留学制度が補給生3年に1回の帰省を許可し、帰省しない冬休みと夏休みにおいて、補給生は「母国の学問の不足」を補い、または講習会を受けることとなった。例えば、1937年夏休み、7月22日から24日まで3日間の夏期講習会が行われた。以下、当時の「夏季講習速記録内容要領」<sup>40</sup>から、講習会の内容を紹介する。

3日間において、3つのテーマをめぐって講演がなされた。それぞれは「日本精神の思惟」（講演者：文部省国民精神文化研究会研究員小野正康）、「近代史より見たる日支関係」（講演者：東方文化学院研究員植田捷雄）、「支那語文法」（講演者：東亜同文書院教授熊野正平）である。

一日目の「日本精神の思惟」では、教育勅語と日本精神の関係について講演が行われた。小野は教育勅語における思考は日本精神の考え方の最も代表的なものであると主張し、それで「国体

の精華]、「国体の精華の具現の綱目」、「国体の精華具現の方法」、「国体の精華具現の実践」に分けて述べた。

二日目の「近代史より見たる日支関係」では、まず中国の対外国関係史の三大潮流を概観し、そして日清戦争後第二次世界大戦に至る日中関係及び日中戦争後の日中関係を分析した。

三日目の「支那語文法」は、「組み合わせの理論」を活用しながら中国語の文法を説明した。

その他、1938年天津中日学院は補給生に対し、冬休みの2月13日から17日までの期間、そして2月23日から3月4日までの期間を利用し、「日本精神の涵養」を目的とする特別授業を行った。修身、日本歴史、日本国文などの科目が設けられ、三組（第一組は高級中学3年、第二組は同1、2年、第三組は初級中学）に分けて授業が行われた。

### 3.2 学業成績

中国人とともに学習した日本人生徒の成績はいかなるものであろう。1933年東亜同文会報告<sup>41</sup>では、天津中日学院に在学した第一種補給生8名の成績が表2のとおりである。

表2 天津中日学院第一種補給生成績（1933年6月）

名 前	学年	成 績					判定	席 次
		第一学期	第二学期	平 均	学年試験	学年成績		
石川福太郎	初3	79.3	72.8	76.1	67.2	71.7	乙	14人中7
小澤茂	初2	91	94.9	93	90.6	92	甲	33人中2
鈴木隆康	初2	84.2	86.8	85.5	89	86.9	甲	33人中3
永江和夫	初2	82.2	84.4	83.3	83	83.2	甲	33人中5
尾崎正明	初2	78.5	77.3	77.9	78.8	78.3	乙	33人中6
川口晃	初2	77.4	79.5	78.5	62.8	72.2	乙	33人中11
秋元一郎	初1	91.8	93.1	92.5	93.3	92.8	甲	17人中1
鈴木明	初1	93.3	93.2	93.3	88.1	91.2	甲	17人中2

出典：1933年上半期東亜同文会報告

天津中日学院は学年成績80点以上を甲等、70点以上を乙等、60点以上を丙等と判定し、90点以上の成績を遂げる学生を特待生となる。1933年度では、補給生には「小澤茂、秋元一郎、鈴木明の三名は成績優良につき特待生となれり。本年度の特待生は全部にて五名なるがその内三名を日本学生が占めたるなり……」<sup>42</sup>といった成績を遂げた。

そして、1935年、補給生には第一学期平均成績甲の者が17名<sup>43</sup>で、1936年6月は「甲の成績を以て進級せる者十九名、乙の成績を以て進級せる者四名の好成績」<sup>44</sup>であった。1937年1月期末試験では、「平均九十点以上の者十一名、八十九点以上三名といふ好成績を示し、而も高中に年鈴木明の如きは96.7点という本学院記録破の点数を得たり」<sup>45</sup>という状況であった。

また、天津中日学院だけでなく、天津市各中学校の初級3年生は進学するために、天津市教育が行う会考（卒業試験：筆者註）に参加しなければならない。1936年における初級3年の補給生の会考での成績は「一名は初級中学校全体の合格者約六百五十名中十四位の好成績をあげ、三名が三十番台を占めたる」<sup>46</sup>のであった。要するに、補給生は同校の中国人生徒だけでなく、他

学校の中国人生徒に比べても、かなり成績が優秀であったことが分かる。

### 3.3 補給生の訓育

天津中日学院は補給生に対して、科目授業の勉強とともに、彼らの思想統制にも常に注意を払った。本節では、補給生の訓育に関しては、同校はどのようなことをしていたのかについて考察する。

補給生の訓育は主として総務長よってに行われ、「機会ある毎に一回を集めて講話し或は茶話会を開き不知不識の間に修身道德の道を注入するに努め」<sup>47</sup>た。つまり、様々な集会を利用し、補給生が知らないうちに「日本精神」の養成ができ、訓育効果の向上も狙った。

初級2年以上の補給生に対しては、青年訓練所に入所させることにした。青年訓練所は天津日本租界において、1933年4月設立されたものであり、天津中日学院は総領事及び財団法人天津共益会の理事と協議した結果、補給生は毎週土曜日午前中、青年訓練所で軍事訓練を受けることとなった。1934年4月まで、入所者がすでに16人いた<sup>48</sup>。身体虚弱者は医師の診断により、教練を延期または免除することができたが、他の補給生は全員訓練を受けなければならなかった。

青年訓練所の課程には、公民の授業があるので、天津中日学院の藤江総務長は青年訓練所主任の委任を受け、補給生の公民の授業を担当し、同校において毎週土曜日の夜間に講じていた。1935年4月に、青年訓練所は天津日本青年学校に合併され、補給生の軍事訓練は引き続き青年学校に委託された<sup>49</sup>。

こうして、補給生は天津中日学院において、中国人生徒と共学し、良好な成績を上げた。また週末及び夏休み、冬休みの課外時間を利用し、日本の中学校の学習も行った。訓育においては、同校は青年訓練所に入所させ、講習会を開催し、集会や修身、道德、公民の授業などを通じて、日本人生徒の「日本精神」の養成を重視したのである。

## 4. 補給生の生活状況

### 4.1 健康と体育

補給生の多くは日本から渡来し、天津の気候、風土、食物などに慣れず、また親元を離れて異郷で勉学し、精神的、身体的に病気にかかりやすいので、健康を損なってしまったケースが多かった。第2節で述べたように、在学中の中国人生徒には、病気で入院したり休学したりするものがあつたが、彼らの病気は主に大腸カタル、呼吸器病、肋膜炎、赤痢などであった。

天津中日学院は休学者、入院者の出た理由として、「本校寄宿舎にありては療養室なく看護の方法を欠くを以て勢ひ入院させざるをえざるに至るもの」<sup>50</sup>であった。休学者は、回復して学校に戻り勉学するものがほとんどだが、病死者もいた。同校は中国人生徒の体質の向上を図り、またホームシックを軽減させるのに、娯楽設備を充実し、体育活動を奨励していた。

天津中日学院は補給生の「健全なる精神教育と健全なる体格」<sup>51</sup>を重視し、学習とともに、体育についても各自の個性を尊重し、十分に体育の発達と向上に注意していた。

補給生が入学して以来、中国人生徒と変わりなく体育の授業が設けられた。補給生は野球、ラグビー、スケートが得意で、またバスケットボール、バレーボールにおいても、上手な生徒が多かった。そして、運動を通して日中生徒の付き合いを深めようと図り、さまざまなスポーツにお

いて、両国の生徒を同一チームに、互いに励み合って、各自の長所を發揮した<sup>52</sup>。

天津中日学院の構内では、「文華池」という湖があったため、氷上が滑らかでスケートをするのにあつらえ向きである。同校は娯楽と体力向上のため、危険のないように施設を設けてスケートを奨励し、毎年1月にスケート大会を催していた。補給生は入学してから、スケートの技が上達したので、池の中央をアイスホッケー場とした。補給生を主体として、中国人生徒を交えたチームは相当強力であった<sup>53</sup>。さらに、補給生はアイスホッケーチームを設立し、「長足の進歩発展をなし、対内的は勿論対外的に大に名声を博せり」、1937年に行われた居留邦人アイスホッケーリーグ戦に参加し、第2位を獲得した<sup>54</sup>。

アイスホッケーチームの外、1938年、天津中日学院の野球部も創設され、補給生が中心となって活動していた。中国人生徒も部活動に参加し、日中両国学生が「親密の度を増したる」のであった。また補給生の要望に応じ、1938年7月剣道部も設置された。剣道部稽古の指導を担当するのは、同校教員木下（三段）、天津日本青年学校白井教官（三段）である<sup>55</sup>。

天津中日学院は補給生の体育を奨励し、様々なスポーツ活動を組織した。補給生は留学している期間では、体力を向上させるとともに、課外時間を豊かにさせ、充実に留学生活を送っていた。また、中国人生徒と体育を通して、友情が深まったのである。

#### 4.2 修学旅行

補給生が日本に対する理解を深めようとするため、天津中日学院は「日本学生中、上級の者九名」を組織して、1934年1月3日から出発して1ヵ月余りの母国見学旅行が行われた。その中には、1930年と1931年に派遣された補給生が多く、彼らは「満州及北支の育ちにて母国を見たることなきもの」が大部分で、母国を充分に知ることが必要であった。また、補給生は見学旅行後、旅行記、感想などを書き、その内容をまとめて冊子として発表したりした。

日本旅行の外、天津中日学院は「日本学生はその性質上民国事情を充分知らしむる上にも亦学習せる華語の実習をなす上にも、将来満支にて活動するにつきての自信力を増やさしむる上にも、屢々民国各地を旅行することは必要有益……」として、天津及び北京への修学旅行も実施された。たとえば1934年の暑中休暇を利用し、北京及び八達嶺万里の頂上への修学旅行をした。また1938年の夏、日中戦争のために江漢高級中学校に在学していた補給生が天津中日学院に転入したが、転入者及び北京を知らない補給生を合わせて22名が教員木下真一の引率により北京へ旅行に行った。そのほか、予科に在学している学生のためにも、天津郊外の日帰り旅行なども行われた。

#### 4.3 中国人生徒との関係

補給生は天津中日学院において、中国人生徒と寝食起居ともに暮らし、日常生活の各方面にわたって頻繁に付き合いをしていた。

1931年天津中日学院の事業報告では、補給生は中国人生徒との関係について、「留華学生と中国学生との間は極めて円満にして互いに工場を批瀝して交り宿室に於て、運動場に於て喜々として楽しみ或は手を握り散歩する等其の間何等感情上に蟠りあるを見ず……」<sup>56</sup>と記述された。また、「炊事委員とか体育部幹事にも補給生を選挙するクラス等あり互いに喜々として愉快に日を過しれり」<sup>57</sup>であり、補給生は学業の外に、学生委員会の仕事も担当し、日中生徒間の交流が一層に深まった。

天津中日学院は留日予備機関として、毎年日本に留学生を派遣した。補給生の存在は中国人生徒が日本を理解するのに、重要な役割を果たしていた。1934年の事業報告では、「殊に日本学生の規律正しき事、礼節あること、よく勉強し体育を重んずる事、優秀なる成績をあげ居る事などにより民国学生は日本学生を通じて我国をよく理解するに至れり」<sup>58</sup>と報告されている。即ち、補給生は成績が優良で、スポーツも重視することで、中国人生徒は身の回りの補給生を見て、日本を理解することも期待されたのである。

### 終わりに

本稿は1930年代から1940年代前半にかけて、天津中日学院における補給生の学習・生活実態を考察した。十三・四歳の若さで中国人生徒と寝食ともに学業に取り組む日本人少年たちは、「少年時代から国民外交の実践を行い、中国語は中国人と変わらず、中国の事情に通じ、中国に多くの心からの友達をそれぞれ持っている」<sup>59</sup>と報告されている。

外務省が1930年より発足した第一種補給生派遣制度は対中国留学史の中において新たな試みであった。天津中日学院は主に第一種補給生の教育を担っていたが、在学していた第一種補給生は病気を除き、ほとんどが無事卒業し、多くが第二種補給生になり中国の大学に進学した。その卒業生の中、池上貞一<sup>60</sup>のような学者もいるし、外交官を務めていた方もおり、残りの多くは大商社で活躍していた。同制度の設立趣旨は「将来東方文化研究上の中心となり且つ日支両国文化提携上の楔子となる人物を養成する」ものであるが、補給生の人生を振り返ると、当時外務省の目的はある程度達成できたのではないかと思われる。しかし、日中戦争勃発により、第二種補給生になった少年たちは中国の大学を卒業するには至らなかった。

天津中日学院は戦中期に入り、思想統治を強化し、補給生に対して訓育教育を行った。生徒を青年訓練所に入所させ、講習会を開催し、集会や修身、道徳、公民の授業などを通じて、中国人生徒の「日本精神」の養成を重要視した。日中戦争勃発以降になると、日本政府は「日支満親善」や「大東亜共栄圏」を実現するため、補給生の卒業生を軍臨時通訳に担当させ、補給生を植民地統治の道具として利用した。同学院の日本人に対する教育は、戦時体制のもと、軍国主義・国家主義的な目標が組み込まれるようになるのである。1945年日本敗戦後、日本人教職員とその家族、並びに少年留学生たちは引揚げ、天津中日学院も中国側によって接収され、25年間存続していた学校は解散した。

本稿は、天津中日学院における補給生教育の展開状況について考察した。戦争中同校で対中国人教育がどのように行われたのかについては今後の課題として追究したい。

### 謝辞

本研究を遂行するにあたり、富士ゼロックス株式会社小林節太郎記念基金より2014年度在日外国人留学生研究助成プログラム助成を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

## 【注】

- 1 日本の対華文化事業の成立と展開状況については、阿部洋（2004）『「対支文化事業」の研究—戦前期日中教育文化交流の展開と挫折』（汲古叢書）を参照する。
- 2 東亜文化研究所『東亜同文会史』、霞山会、1988年、89頁。
- 3 東亜同文会『東亜同文会史 昭和篇』、霞山会、2003年、44頁。
- 4 大里浩秋・孫安石編「在華本邦補給生、第一種から第三種まで」『留学生派遣から見た近代日中間係史』、御茶の水書房、2009年、111-152頁。大里浩秋、「在華本邦補給生、第一種から第三種まで」『中国研究月報』61(9)、2007年、17-39頁。
- 5 大里浩秋、「在華本邦補給生、第一種から第三種まで」『中国研究月報』61(9)、2007年、18-19頁。
- 6 藤江真文『自画自賛』、未公開、出版年代不詳、41頁。
- 7 前掲書『自画自賛』41-42頁。
- 8 ここで言及した「第一回生」は実際には2回生である。1回生は1930年11月天津中日学院に入学した石川福太郎である。
- 9 JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015560700、在華本邦人留学生補給実施関係雑件／選定関係 第一巻（B-H-05-07-00-02-01-00-01）（外務省外交史料館）。
- 10 前掲書『東亜同文会史 昭和篇』、「中日学院昭和五年度下半期事業報告」、362頁。
- 11 「中日学院昭和六年度上半期事業報告」、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015255100、東亜同文会関係雑件／補助関係 第四巻（B-H-04-02-00-01-01-00-00-04）（外務省外交史料館）。
- 12 前掲「中日学院昭和六年度上半期事業報告」。
- 13 「中日学院昭和八年度上半期事業報告」、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015256700、東亜同文会関係雑件／補助関係 第六巻（B-H-04-02-00-01-01-00-00-06）（外務省外交史料館）。
- 14 前掲大里論文「在華本邦補給生、第一種から第三種まで」、129頁。
- 15 「中日学院昭和九年度上半期事業報告」、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015257600、東亜同文会関係雑件／補助関係 第七巻（B-H-04-02-00-01-01-00-00-07）（外務省外交史料館）。
- 16 「中日学院昭和十年度上半期事業報告」、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015258200、東亜同文会関係雑件／補助関係 第七巻（B-H-04-02-00-01-01-00-00-07）（外務省外交史料館）。
- 17 「中日学院昭和十一年度上半期事業報告」、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015259900、東亜同文会関係雑件／補助関係 第八巻（B-H-04-02-00-01-01-00-00-08）（外務省外交史料館）。
- 18 「中日学院昭和十二年度上半期事業報告」、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015260800、東亜同文会関係雑件／補助関係 第九巻（B-H-04-02-00-01-01-00-00-09）（外務省外交史料館）。
- 19 「中日学院昭和十三年度上半期事業報告」、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015261800、東亜同文会関係雑件／補助関係 第十巻（B-H-04-02-00-01-01-00-00-10）（外務省外交史料館）。
- 20 「中日学院昭和十四年度上半期事業報告」、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015251000、東亜同文会関係雑件 第九巻（B-H-04-02-00-01-00-00-00-09）（外務省外交史料館）。
- 21 前掲書『東亜同文会史 昭和篇』、428頁。
- 22 前掲書『東亜同文会史 昭和篇』、425頁。
- 23 前掲書『東亜同文会史 昭和篇』、440頁。
- 24 前掲書『東亜同文会史 昭和篇』、442頁。
- 25 前掲書『自画自賛』45頁。
- 26 中国の新学年は毎年9月から始まる。
- 27 前掲書『自画自賛』41頁。
- 28 同上41頁。

- 29 前掲「中日学院昭和六年度上半期事業報告」。
- 30 前掲「中日学院昭和九年度上半期事業報告」。
- 31 前掲「中日学院昭和十年度上半期事業報告」。
- 32 「中日学院改善方に関する件昭和2年10月」、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015324800、天津中日学院関係雑件 第一巻（B-H-04-03-00-01-00-00-00）（外務省外交史料館）。
- 33 前掲書『東亜同文会史 昭和篇』、「中日学院昭和五年度下半期事業報告」362頁。
- 34 前掲「中日学院昭和十年度上半期事業報告」。
- 35 前掲書『自画自賛』、43-44頁。
- 36 前掲「中日学院昭和九年度上半期事業報告」。
- 37 前掲書『東亜同文会史 昭和篇』、「中日学院昭和十五年度上半期事業報告」、429頁。
- 38 前掲「中日学院昭和八年度上半期事業報告」。
- 39 前掲書『東亜同文会史 昭和篇』「中日学院昭和八年度下半期事業報告」、379頁。
- 40 「夏季講習会実施要項及速記録」、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015326700、天津中日学院関係雑件（B-H-04-03-00-01-00-00-00）（外務省外交史料館）。
- 41 前掲「中日学院昭和八年度上半期事業報告」。
- 42 前掲「中日学院昭和八年度上半期事業報告」。
- 43 「中日学院昭和十年度下半期事業報告」、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015258300、東亜同文会関係雑件／補助関係 第七巻（B-H-04-02-00-01-01-00-00-07）（外務省外交史料館）。
- 44 前掲「中日学院昭和十一年度上半期事業報告」。
- 45 「中日学院年昭和十一年度下半期事業報告」、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015260100、東亜同文会関係雑件／補助関係 第八巻（B-H-04-02-00-01-01-00-00-08）（外務省外交史料館）。
- 46 前掲「中日学院年昭和十一年度下半期事業報告」。
- 47 「中日学院昭和七年度上半期事業報告」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015255800、東亜同文会関係雑件／補助関係 第五巻（B-H-04-02-00-01-01-00-00-05）（外務省外交史料館）。
- 48 前掲「中日学院昭和九年度上半期事業報告」。
- 49 前掲「中日学院昭和十年度上半期事業報告」。
- 50 前掲「中日学院昭和十四年度上半期事業報告」。
- 51 前掲「中日学院昭和八年度上半期事業報告」。
- 52 「中日学院昭和七年度下半期事業報告」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015255900、東亜同文会関係雑件／補助関係 第五巻（B-H-04-02-00-01-01-00-00-05）（外務省外交史料館）。
- 53 前掲書『自画自賛』73頁。
- 54 「中日学院年昭和十一年度下半期事業報告」、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015260100、東亜同文会関係雑件／補助関係 第八巻（B-H-04-02-00-01-01-00-00-08）（外務省外交史料館）。
- 55 前掲「中日学院昭和十三年度上半期事業報告」。
- 56 前掲「中日学院昭和六年度上半期事業報告」。
- 57 「中日学院昭和七年度上半期事業報告」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015255800、東亜同文会関係雑件／補助関係 第五巻（B-H-04-02-00-01-01-00-00-05）（外務省外交史料館）。
- 58 「中日学院昭和九年度下半期事業報告」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015257700、東亜同文会関係雑件／補助関係 第七巻（B-H-04-02-00-01-01-00-00-07）（外務省外交史料館）。
- 59 前掲書『自画自賛』46頁。
- 60 池上貞一（1918-2014）、1931年天津中日学院に入学し、元愛知大学名誉教授であり、現代中国政治の専門家である。